

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：32670

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05569・19K20779

研究課題名（和文）大正期における「バレエ」移入の様相と背景：G.V.ローシー研究を中心に

研究課題名（英文）Aspects and background of "ballet" transfer in the Taisho era : Focus on the activities of G.V.Rosi

研究代表者

山田 小夜歌（YAMADA, Sayaka）

日本女子大学・家政学部・助教

研究者番号：40825204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は大正期日本バレエ黎明の様相を考察するにあたって、帝国劇場に招聘されたバレエ教師・振付家・演出家G.V.ローシーGiovanni Vittorio Rosi（1867-1940?）に着目し、ローシー自身が来日前に体得したバレエ、すなわち19世紀末から20世紀初頭のイタリアや英国におけるバレエの実態と特徴を、文化的・社会的背景を交えて多角的に解明した。そのうえで、彼が大正期日本の帝国劇場やロイヤル館での上演活動を通して展開した多様なバレエ実践との影響関係を検証し、その後の日本における上演芸術・芸能への継承性について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本バレエの黎明と発展は、フランスのロマン主義バレエとロシアのクラシックバレエ、20世紀初頭のバレエリユスを主軸とする発展史とのかかわりの中で語られることが多い。本研究ではG.V.ローシーに着目することによって、彼の基礎を成していた19-20世紀転換期イタリアのバレエ、その影響を受けていた英国のヴァラエティという大衆的な劇場文化とバレエに光を当てた。これによって、日本へのバレエ移入最初期におけるバレエの多様性、異種混交なあり様を示すとともに、近代バレエ発展史ではあまり語られることのない19-20世紀転換期欧州における「バレエ」の多面的な様相を浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the dawn of Japanese ballet in the Taisho period, focusing on Giovanni Vittorio Rosi (1867-1940?), a ballet teacher, choreographer and director who was invited to the Imperial Theatre. The study elucidated, from various perspectives including cultural and social backgrounds, the reality and characteristics of the ballets that Rosi himself had acquired prior to his arrival in Japan, namely those in Italy and Britain from the end of the 19th to the beginning of the 20th century. It also analyzed the relationship between his stage activities prior to his arrival in Japan and the various ballet practices he developed through his performance activities at the Imperial Theatre and Royal Theatre (Akasaka) during the Taisho period and considered the impact of his practices on the Japanese art and entertainment scene.

研究分野：芸術一般、舞踊学

キーワード：バレエ 帝国劇場 ミュージックホール ヴアラエティ劇場 ロンドン ミラノ・スカラ座 浅草オペラ 歌劇

## 1. 研究開始当初の背景

日本バレエ史研究において G.V.ローシーは、上野(1992)、川島(2012)、杉山(2011)等によって「日本初のバレエ教師」として位置づけられるなど、一定の評価が成されてきた。しかし他方で、彼に離反した教え子たちが日本モダンダンスを生んだことは認められても、日本に「バレエ」の系譜を残すことはなかったことが度々指摘されてきた。1911年に開場した帝国劇場の歌劇部(1912年設置)のメンバーをはじめローシーに指導を仰いだ多くの人材は、その後浅草オペラなどで極めてバレエ的な活動を行ったが、大衆に迎合した浅草そのものの評価とも相まって、それらは「バレエ」として認められることはなかった。よって、今日の日本バレエ界に直結する弟子を輩出し「日本バレエの母」と言われるエリアナ・パヴロバの活動に比して、ローシーの日本での一連の舞踊活動は本格的なバレエには程遠く、その芸術的価値を云々するレベルのものではない「日本バレエの前史」として、一様に厳しい評価が成されてきたのである。

こうした従来のローシーやエリアナを含めた日本バレエ史の評価においては、常に「正統なクラシックバレエであったか否か」に着眼されてきたといえる。この「正統なクラシックバレエ」とは、フランスを中心に広まったロマン主義(ロマンティック)バレエを経てロシアで発展した「クラシックバレエ」を意味する。ゆえに、現在「バレエ」といえばこの「クラシックバレエ」を指すことが通念となっているほど、バレエにおけるロシアの影響は大きい。その背景には、ローシー離日後に来日したロシア人バレエリーナたちや、バレエ・リュスを継承した小牧正英による一連の上演活動など、いわば「ロシア的バレエ」によって、今日の日本バレエ界が形成されてきたという経緯がある。こうしたロシア的バレエ優位の歴史観は日本の場合に限ったことではなく、ロマンティックバレエからクラシックバレエへ、その後のバレエ・リュス誕生をもってバレエは芸術と化し、その芸術家たちによってグローバル範囲で総合芸術たるバレエが流布したという一連の発展史は、世界バレエ史の通念として広く認知されているといえる。ローシーをめぐる言説においても、バレエ・リュスの教師や出身ダンサーとの結びつきなど、ロシア的バレエとの関係をもってローシーの「正統性」と説く論考が散見され、ロシア的バレエ観の優位、すなわち現在を投影したバレエ概念がローシーの評価にも反映されていることが指摘できる。

しかしながら、当のローシーはイタリア出身で英国ロンドンを中心に活動した経歴をもち、彼の「バレエ観」はロシアのそれとは異なることが推察される。しかも、帝室=官を主軸とするロシア的バレエと、民衆間の娯楽文化として発展した欧州のバレエとは、作品や上演実態の違いはもとより、社会的・文化的意味においても相当の隔たりが窺える。

研究代表者が本研究にいたる初段階において、ローシーの日本滞在中、特に帝劇教師として活動していた期間を中心に上演作品と指導の実際について調査・検討を進めた結果、ローシー作品のスペクタクル的な振付・演出の趣向、題材・舞踊形式の多様性、そしてその指導実践方法には、来日以前の彼自身の芸歴が多分に反映されていることが示唆された。ローシーが日本で実践した様々なバレエ活動を理解し、日本バレエ史への功績を考察するためには、彼がそれまでに経験したバレエの特性や評価を捉え、ローシーが体得した「バレエ観」を探ることが不可欠であると考えられる。それによって、これまで「正統ではないもの」、すなわち「ロシア的バレエではないもの」として日本バレエ正史から外されてきたローシー由来の「バレエ」の意義について、新たな知見が得られるのではないかと考えるにいたった。

## 2. 研究の目的

本課題は、G.V.ローシー自身が来日以前に体得した19世紀末~20世紀初頭の欧州における「バレエ」の性格を多角的に読み解き、彼が大正期日本で実践したバレエ活動との関係を分析する。先述のとおり、日本を含む世界各地のバレエ勃興に大きく関与した帝政ロシア由来のクラシックバレエ~バレエ・リュスの隆盛は、現在でもその影響を色濃く残す。他方、19~20世紀転換期欧州を基点とするローシーが体得したバレエは、同時期世界的にも勃興しつつあった大衆・娯楽文化の中にあって、ロシア的バレエ、すなわち現在のバレエとは相当に異なるものであった。本課題では、ローシーの基礎を成したであろう欧州の「バレエ」、とくにイタリアや英国ヴァレエティ劇場のバレエを中心に史資料からその実態を具体的に解明し、大正期日本でローシーが実践したバレエとの影響関係を分析する。

## 3. 研究の方法

(1)ローシー来日前の活動調査として、イタリアのバレエ教育の実際と彼が従事した上演活動について資料収集を行う。具体的にはスカラ座附属博物館所蔵の資料と舞踊・音楽関係記事を多数扱う新聞を調査し、スカラ座バレエ学校を中心とするバレエ教育の内容、スカラ座を含むイタ

リア国内の劇場および海外巡業公演の実態を明らかにする。同時に、当時のイタリアバレエの特徴をロンドンやロシアの事例と比較検討する。

(2) ローシーが来日直前まで活動の拠点としていた英国、とくにロンドンの2つのヴァラエティ劇場、アルハンブラ劇場とエンパイア劇場について調査を行う。すでに手元にある同2劇場の上演プログラムや各種書簡・文書等の整理と分析を進め、ローシーの同地での上演活動の実態を明らかにする。並行して、高級紙・大衆紙を問わず広く新聞・雑誌記事の収集と分析を進め、ヴァラエティの劇場としての特徴(観客層、劇場の属性などを含む)と、作品の傾向を分析する。加えて、当時の英国の文化史・社会史に関する文献を精読し、ヴァラエティ劇場式バレエの社会的位置づけと同時期イタリアバレエとの影響関係を考察する。

(3) ローシーの日本滞在中、帝劇とローヤル館における上演活動と彼が来日以前に体得した欧州の「バレエ」との比較検討を行う。ローシーの帝劇での活動調査についてはある程度進んでいるものの、ローシーが主宰した赤坂ローヤル館については調査が不十分であるため、歌劇雑誌『オペラ』『オペラ評論』『歌舞』ほか新聞記事等の調査によって実態を明らかにする。これらの結果を踏まえ、ローシーが来日以前に欧州で体得した大衆・娯楽的バレエと帝劇・ローヤル館の作品群との関連を検討し、各劇場のあり方や文化的・社会的意義を分析するとともに、相互の影響関係を比較・検討する。とくに、帝劇はその設立趣旨に「西洋のセアター、オヴ、ヴァライエター」を意図した記述がみられるなど、ヴァラエティ劇場との共通性が推測される。近代日本における文化政策の観点にも留意して考察する。

(4) ローシーの元教え子たちのその後の活動を追ひ、上記で解明されたローシーの諸実践が彼らの活動を通してどのように展開したのかを探ることで、日本におけるローシー・バレエの受容と影響について考察する。

#### 4. 研究成果

(1) ローシーの日本滞在中の上演活動の基盤となったイタリアと英国ロンドンでの活動について、これまで曖昧だった彼の訓練歴と出演歴を史資料から可能な限り明らかにした。バレエ技法とマイム技法の調和を求めるイタリアのバレエ教育の特色と、19世紀末イタリアの象徴的作品「バット・グランデ」にみられる特徴を導出し、それがローシーらイタリア人舞踊家の活動によって世界各地へ伝播していたことを確認した。

(2) ローシーが20世紀初頭に活動拠点としたロンドンのアルハンブラおよびエンパイア劇場での上演活動について、実際の活動の記録と同地における評価を明らかにした。また、ヴァラエティ劇場におけるバレエについて、当時のロンドンの社会や観客層の多様化に呼応した異種雑多なレパートリーと、ダンサーたちのジャンル横断的な上演活動の様相を浮かび上がらせ、それらの同時期イタリアのバレエとの共通性、概してバレエ史上重要とされるパリ(オペラ座)やロシア(帝室劇場)のバレエにはみられない特異性について考察した。

(3) これまで史実的根拠が必ずしも十分ではなかったローシー日本滞在中約5年半の活動の軌跡を時系列に整理し、上演作品、公演日時・場所、ローシー関与の実態を一次資料によって裏付け、ローシーの帝劇やローヤル館を中心とする多彩な上演活動を明らかにした。また、ローシーが実践したバレエ指導と舞踊作品の内容を明らかにし、彼自身が体得した欧州式のバレエが、直接または改良を加えられながら日本に移入されていくさまを確認した。

(4) 上記を総合的に検討したことで、19世紀末~20世紀初頭の英国ヴァラエティ劇場のあり方やバレエ作品、舞踊家の活動に関し、同時期イタリアのバレエ事情との共通性、さらには日本の帝劇やローヤル館との共通性、親和性を具体的に確認することができた。

(5) 研究当初の予定では、ローシーとイタリアバレエとの結びつきを検証すべくミラノ・スカラ座附属図書館ほか現地での台本や上演プログラム、新聞・雑誌記事等一次資料の調査を計画していたが、2年間に渡る新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより実現できなかった。そこで一部研究方法を変更し、ローシーが来日以前に創作したと思われる作品で、台本、手稿譜、振付ノートといった比較的多くの資料が手元にあるバレエ《クオ・ヴァディス》の分析を通して、彼の創作における手法や傾向、作品の特徴的な要素を見出すことを試みた。作品の全貌を捉えるうえで重要になる音楽資料については、演奏家の研究協力を得て、ピアノ手稿譜をもとに《クオ・ヴァディス》楽曲の全曲復元が実現し、録音資料として残すことができた。得られた音楽資料は作品台本、振付ノート等とあわせて分析・考察を進めており、今後成果公表につなげるべく準備を行っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>山田 小夜歌                          | 4. 巻<br>3          |
| 2. 論文標題<br>バレエとメディアー英国ミュージックホールにおける「英仏協商」 | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>早稲田オペラ/音楽劇研究                    | 6. 最初と最後の頁<br>1-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし             | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）     | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>山田 小夜歌                                   | 4. 巻<br>67          |
| 2. 論文標題<br>舞踊家G.V.ローシーとローシー・オペラ・コミック：赤坂ロイヤル館での試行錯誤 | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>日本女子大学紀要. 家政学部                           | 6. 最初と最後の頁<br>49-60 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                      | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）              | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Sayaka YAMADA  |
| 2. 発表標題<br>The dawn of ballet in Taisho Japan: Focus on the activities of ballet master G.V.Rosi          |
| 3. 学会等名<br>EAJS 2021 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>山田 小夜歌                                 |
| 2. 発表標題<br>G.V.ローシーの来歴にみる大正期帝劇の舞踊・音楽劇と世紀転換期西欧のバレエ |
| 3. 学会等名<br>早稲田大学 オペラ/音楽劇研究所 11月研究例会（第191回オペラ研究会）  |
| 4. 発表年<br>2020年                                   |

|                           |
|---------------------------|
| 1. 発表者名<br>山田 小夜歌         |
| 2. 発表標題<br>G.V. ローシーの作品創作 |
| 3. 学会等名<br>舞踊学会 第72回学会大会  |
| 4. 発表年<br>2020年           |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山田 小夜歌                                  |
| 2. 発表標題<br>G.V. ローシーの活動と背景：世紀転換期西欧と大正期日本におけるバレエの様相 |
| 3. 学会等名<br>舞踊学会第24回定例研究会                           |
| 4. 発表年<br>2019年                                    |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山田 小夜歌  |
| 2. 発表標題<br>舞踊家G.V. ローシーの試み 英国ヴァラエティ劇場から浅草へ                               |
| 3. 学会等名<br>民族藝術学会第89回東京例会シンポジウム「浅草オペラへのまなざし さまざまな文化を包摂する大正期芸能の再検証」(招待講演) |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>山田小夜歌                   |
| 2. 発表標題<br>G.V. ローシーと世紀転換期欧州のバレエ文化 |
| 3. 学会等名<br>舞踊研究会                   |
| 4. 発表年<br>2018年                    |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

博士論文「大正期日本におけるG.V.ローシーの活動と背景：世紀転換期西欧のバレエ文化とその移入」お茶の水女子大学大学院、2019年。  
[https://teapot.lib.ocha.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=42569&item\\_no=1&page\\_id=64&block\\_id=115](https://teapot.lib.ocha.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=42569&item_no=1&page_id=64&block_id=115)

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|